

大学発アーバンイノベーション神戸 研究成果報告書

令和5年5月24日

申請区分	一般助成型	課題番号	A20107
研究課題名	神戸における観光資源の再設定：ユダヤ人観光の可能性		
研究期間	令和2年度～令和4年度		
研究代表者	氏名	辛島 理人	
	大学等	国立大学法人神戸大学	
交付決定額(研究期間全体)		1,048,306 円	

○研究成果の概要（400字以内）

COVID-19により国内外の現地調査ではなく、神戸史やユダヤ世界に関する文献収集、神戸市内の当事者・関係者との面談、史跡の調査、展示会の開催などを行うことを通じて、神戸市内の歴史資源やそれを活かした市民活動の実態を調査した。神戸観光は、交通網を活かした発展の可能性は大きいですが、正規雇用を増やすという課題がある。観光の正規雇用を増やすには、曜日や季節による訪問者数の増減を減らし、通年での安定した集客が必要であり、MICE（Meeting、Incentive Travel、Convention、Exhibition/Event）という強みに加え、①国内観光（特に教育旅行）②インバウンド③アウトバウンド（＝空港国際化対策）が重要となる。神戸と世界とのつながりを示す歴史資源は、それ自体が（姫路城のような）インバウンドを誘客するコンテンツとなることは難しいが、MICEや教育旅行による来神者をインバウンド・アウトバウンドへと導く資源となりうると考えられる。

○研究成果の学術的意義や社会的意義（200字以内）

市内の様々な団体・施設が1940年前後の神戸にいたユダヤ難民の歴史を発掘し顕彰しつつある。敦賀市（シベリア鉄道からの中継地）は博物館を設置して熱心にユダヤ人観光客を誘致しようとしている。本プロジェクトを通じて、それらの活動と交流する機会を得ることができた。また、市内の観光事業者と情報交換する機会にも恵まれ、神戸観光局による教育旅行『KOBE SDGs 探究プログラム』の作成に参加した。

1. 研究開始当初の背景

コロナ後の回復が見込まれているインバウンドは、その中でも、個人旅行者（FIT）が団体旅行の前に戻ってくるといわれており、神戸市がこれからインバウンドの取り込むためには、FITへの働きかけが重要になると考えられる。しかしながら、FITは全国各地が有望な顧客とみなしており、競争の激しい市場といえる。

2. 研究の目的

ポストコロナを見据えた際、近年のインバウンドブームに出遅れた神戸は、観光地として海外から観光客を誘致するために、どのような歴史文化的資源を活かすことができるのか？この問いに答えることが研究目的であった。

3. 研究の方法

本プロジェクトでは、神戸にユダヤ人観光客を呼び寄せる歴史文化的資源があると考え、その可能性を検証した。COVID-19により国内外の現地調査ができなかったため、神戸史やユダヤ世界に関する文献

収集、神戸市内の当事者・関係者との面談、史跡の調査などを行うこととした。

4. 研究成果

国際文化学研究科では、複数の教員有志が観光に関する研究・教育のみならず、現場の担い手、特に観光地域づくりを各地でリードする卒業生とのネットワーク構築を行ってきた。その資源をもとに、本プロジェクトでは、神戸におけるユダヤ世界の歴史遺産の実態と観光資源としての可能性について検証した。開港以降の神戸とユダヤ社会の関係、特に、ユダヤコミュニティの形成史、戦時期におけるヨーロッパからのユダヤ系難民受け入れ、戦後神戸におけるユダヤ人の活躍、これらの歴史をふまえ、ユダヤ人旅行者を誘致しうる文化資産を整理した。

2020 年秋には、ポーランドにある博物館の協力を得て、兵庫県国際交流協会ギャラリーでユダヤ文化に関する写真展を開催し、NHK・サンテレビ・朝日新聞・読売新聞・産経新聞が報道したこともあり、数多くの来場者があった。そういった活動を通じて、それらの歴史資産を継承・活用する市民活動とのネットワークを構築し、意見・情報交換を行うことができた。2023 年 2 月の「大学発アーバンイノベーション神戸 成果報告会」では、神戸市長や神戸大学学長とのディスカッションに参加し、神戸市の観光政策について提言を行った。